

# グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



## 第15章



～「ゲット」 「起きなさい、今すぐ！」洗濯女はラザロに身をかがめ、彼の脇腹を指で突いて叫んだ。「起きなさい、ラザロ様！」ラザロは息を呑んで目を覚まし、腹を押さえたが、無意識のうちに彼女の手も握っていた。彼女は手を振りほどき、彼を叱った。「見てごらんください、ご主人様に謁見する前に、新しいシャツを汚してしまっ  
て！」

ラザロは体を起こして、酒で染み付いた腹を見下ろした。するとすぐに頭を抱え、顔をしかめてベッドに倒れ込んだ。「ああ、神様。万物は巡り巡るものですね。」

「だめよ！」洗濯女は怒鳴った。「そのシャツを返して！旦那様がもうすぐいらっしゃるわ。さあ、そこから立ちなさい！」

ラザロはうめき声を上げ、よろめきながら立ち上がると、壁に重くもたれかかった。彼は部屋を改めて見渡すかのように、用心深く周囲を見回した。それから目をこすり、鼻筋をつまみながら、オディーノ修道士はワインの悪影響について何も教えてくれなかった、と独り言ちた。

「どんな悪事にも良い面はあるのかしら？」女はそう言ってラザロを壁から引き離し、シャツを掴んでテーブルの方へ連れて行った。「空を飛べる男だろうが何だろうが、あなたたちは皆同じよ。一人残らず。」彼女は彼を振り回し、

そこへ。「男たちよ、清めて、飲ませて、また清めて」と彼女は言いながら、彼のブラウスのボタンを外した。彼女が彼の腕を叩き落とすと、ラザロはまた顔をしかめて頭を押さえた。「じっとしてなさい。時間がないわ。」

彼はため息をつき、向きを変えて空っぽのテーブル、そこに置かれた真新しい燭台、そしてすっかり様変わりした部屋を調べた。周りには食べ物のカスも、散らかったものも、こぼれたものも一切ないことに気づいた。彼は部屋の隅の方を見た。「ネズミはどこだ？」

「ネズミ？どのネズミ？」

「それはまさにそこ、部屋の隅にあったんです」と彼は指差しながら言った。

「まだ酔ってるわね」彼女はため息をつき、首を横に振った。

「食べ物のことですか？」

「それは今朝、あなたがいびきをかいている間に持ち去られたのよ」と彼女は言い放ち、彼のシャツから腕を引き抜いた。「それに、あなたは旦那様の食事の半分を床に落としたわ。あんなに親切にもてなしていただいたのに、恥を知りなさい。」

「ワインのせいだった。立っていられなかった。知らなかったんだけど…」

彼女は彼の話を遮り、説教じみた口調で言った。「そんなたわごとは何度も聞いてきたわ。ワインのせいよ、でもあなたのせいじゃないわ。」彼女は彼のブラウスを脱がせ、ゆるく引っ張り、シャツを様々な角度にひっくり返して、紫色に変色した状態を調べた。

ラザロは翼を整え、頭を掻いた。「そうおっしゃるのですか、ダルシクール卿 彼は来るのですか？」

「そして、実に直接的に」と彼女は言い放ち、彼から離れて立ち去った。「それは起こるべくして起こったことだったのよ」

それ以来、彼はあなたのみじめな境遇を知ると、あなたに気持ちを落ち着かせるための十分な時間を与えてくれたのです。もうほとんど一日中。」彼女は顔をしかめ、シャツを腕にかけながら彼に呼びかけた。「客が彼をこれほど長く待たせることは滅多にありません。彼に謙虚になり、ワインをあなたが思っているほど責めない方がいいでしょう。」洗濯女はドアをノックしてそっと出て行った。

ラザロがテーブルの周りを回り、ベンチに座ると、再びドアが開いた。3人の大柄な衛兵が部屋に入ってきて、壁際に並んだ。その後、黒髪で薄い髭を生やした若い男が勢いよくドアを通り抜け、急に立ち止まり、薄緑色の目をラザロに向けました。彼の顔は、

ほとんど少年のような顔立ちで、他の部分とは対照的だった。背が高く、体格が良く、歴戦の兵士のような風格を漂わせていたからだ。彼はマントの留め金を外し、護衛の構えた腕にかけた。それからダブルブレストのベストを整え、微笑んで、ゆっくりとラザルスに近づいた。「ラザルス・ゴグさんですね？」彼は頷いた。「私はセリス・ダルシクール卿、ラングネ伯爵で、この地の領主です。」彼はラザルスの向かい側のテーブルを回り込んだ。「あなたとのこの瞬間を待ち望んでいました。」彼は

彼は両手を上げて、ラザロのシャツを着ていない胴体を明らかに喜んで見つめながら、「ついに会えたな」と言った。

ラザロは深く長く頭を下げて敬虔に答えた。「閣下、光栄なのは私の方です。」

「いえいえ、起きる必要はありませんよ」と彼は嬉しそうに言った。

ラザロは立ち上がり、近づいてくる貴族の姿を見つけた。男の衣服の下から、小銭がチャリンチャリンと音を立てるのが聞こえた。そして、男のベストが一瞬開き、鞆に収まった短剣の柄が露わになるのが見えた。

ダルシクールはため息をつき、首を振りながら、「私は心からお詫び申し上げます。あなたが私の拘留中に受けた虐待について。私は厳命を下しました。

あなたに危害は及ばなかった。私の部下たちは勇敢だった。中にはあなたを守るために命を落とした者もいる。もしこのような騒乱が起こると予想していたなら、もっと多くの兵を派遣しただろう。

ラザロは視線を落とした。

ダルシクールは息を吸い込み、テーブルを軽く叩いて微笑んだ。「それでもあなたはここにいらっしゃる。神に感謝。そして今、あなたは無事です。必要であれば、私の軍隊と聖座の神聖な権威、特にこの地方の権威は、あなたの命令に従うことをお約束します。」彼はうなずいた。「では、すべてお気に召しましたでしょうか？衣服、宴会、そしてワインも。」

「確かに」とラザロは言い張った。「これほどたくさんの食べ物が並んだ大きな食卓も、これほど立派な衣装も見たことがありません。ワインをこぼしてしまい、申し訳ありません。バランスを崩してしまいました。全く予想外のことでした。」

領主は手を振って彼を下がらせ、「最近の君の苦難を考えれば、当然のことだ。汚れを隠すにはあまりにも明るい色のブラウスだった」と安心させた。彼は指を鳴らした。「ああ！私の侍女が今まさに別のブラウスを持って来るだろう。もっと暗い色が必要だ。夕暮れのように深い色だ」彼はため息をつき、微笑んだ。「君は今、ブラウスを着ていて、半分裸なのだから、君の最も素晴らしい部分を見せてくれないか。特に、翼を見せてくれないか？」彼は彼に振り向くように合図した。「翼を広げて見せてくれ」

ラザラスは従い、一瞬全身を露わにしてから振り返った。すると兵士たちの鋭い視線と、ダルシクールの目に宿る緑色の光に気づいた。男は一度手を叩き、組んだ指を顎に当てた。「実に驚くべきことだ。ラザラス、君はなんと素晴らしい翼を持っていることか。実に素晴らしい。」彼はテーブルのベンチの方を指差し、自らも近づいていった。「さあ、どうぞお座りください。」

ラザロがテーブルに着席すると、その男は彼に近づき、口を大きく開けて、ただ「ああ」とだけ言った。

ラザロは、その粗野な仕草に従い、ダルシクールに向かって口を大きく開けた。

領主はくすくす笑い、テーブルを叩いた。「それにしても、なんて大きな歯をしているんだ。実に素晴らしい！」彼は自分の耳たぶをつかみ、体を傾けてラザ口の耳を見つめた。

「それに、耳も鋭いんだろうな？」

「はい、閣下」ラザ口は、注目を浴びたことに少し居心地の悪さを感じながら認めた。彼の男らしさに欠ける顔立ち。彼は咳払いをした。「もしよろしければ、私を呼び出した理由をお聞かせいただけませんか？」

「では、そうしましょう」とダルシクールは喜びを抑え、落ち着いた口調で言った。「ある特定の任務であなたをお呼びしたのです。あなたのような才能ある方なら、きっとお役に立てるでしょう。」

「それはどんな任務ですか？」

貴族は息を吸い込み、テーブルを見つめ、少し考え込んだ後、指でテーブルを軽く叩いた。「おそらく、最初から始めるべきでしょう？」

「もしよろしければ、お話しいただけますか？」ラザ口は微笑みながらうなずいて答えた。

「では、よろしい。私の兄は、かつてラングネ伯爵であったギルダール・ダルシクール卿です。彼の城はここから西へ何リーグも離れたところにありますが、彼はもう何年も前に亡くなりました。妻もその後まもなく出産で亡くなり、跡継ぎとなる者はおらず、赤ん坊だけが生き残りました。ギルダールは、他の不幸な出来事と同様に、この可能性も予見しており、すでに最後の準備を済ませていました。」

遺言書は、まさにこのような事態に対処するための、合法かつ拘束力のあるものです。その中で、彼は次のように定めています。もし彼に財産を管理する能力のない子供がいるならば、その子供が十分に管理できるようになるまで、私が財産管理を引き継ぐこと。さらに、彼は次のように記しています。もしその子供が女の子であるならば、私は彼女を成人させ、適切な高官との結婚を見届けてから、財産を二人に引き渡すこと。宣誓の上記録された令状と法律によって宣言されたとおり、私は生きている限り彼の命令を遵守する義務があり、したがって、私の死後、その女の子は結婚しているか否かにかかわらず、彼の全財産を相続することになります。その女の子は私の姪のエンドラ・ダルシクールで、情欲と理性、あるいは善悪を区別できる年齢にはまだ達していません。偶然にも、彼女はその後私の寵愛を失い、奔放で貪欲な魔女と化し、私の父のかつての領地すべて、つまりギルダールの領地も私の領地もすべて彼女に明け渡すよう、馬鹿げた要求をするようになった。彼女は策略を巡らせ、ボルボネーズ伯フレデリック・ユゴン卿と手を組んだ。酔っ払いの肉屋ユゴンよりは豚の方がましな求婚者だろう。それでも彼女はユゴンを説得して兄の最終判決に異議を唱えさせ、

彼は王室裁判所に嘆願書を提出したが、同時に襲撃作戦を開始し、ギルダールの土地の畑を耕していた私の民を虐殺した。その結果、王室判事は交渉のために大司教を召喚した。教会は彼が事態が解決するまで休戦を遵守するよう求めた。しかし、ヒューゴンはその後休戦を破った。

そしてギルダールの城を包囲し、子供たちの命さえも容赦しなかった。

「子供たちが！」ダルシクールはテーブルを拳で叩きながら叫んだ。

ラザロはびくっとした。

ダルシクールは拳を緩め、二本の指で目をこすった。「私の怒りをお許してください。」  
彼は深呼吸をして、妻と親戚についてさらに説明した。「ダルシクール夫人  
そして彼女の3人の幼い弟たちは、ユゴンが包囲した時、ギルダールの城にいました。彼の部下た  
ちは彼らを殺し、私の兵士や農民の遺体とともに彼らの遺体を焼きました。今、私はエンドラが弔意  
と、彼らがそうではなかったという約束を送ってきたと信じています。  
ユゴンが攻撃した時、城内にいた。しかし、ダルシクール夫人とその兄弟たちは2週間行方  
不明のままだ。

ダルシクールは突然テーブルから立ち上がり、壁に向かって歩み寄り、腕を組んで石に背中をもたせかけた。そし  
てラザルスに頷いた。「最近、エンドラとヒューゴンの間に全く異なる関係があるという知らせを受けた。私の情  
報提供者によると、ヒューゴンはエンドラを自分とは別に監禁し、自分はギルダールのベッドで寝ているという。こ  
のことから推測するに、彼は私がまだ死んでいないから彼女の命を助けているだけだ。そして私が死に、  
彼女も死んだら、彼は私の最後の布告に抗議し、父の領地全体を完全に奪い取ろうとするだろう。私は彼の計  
画を知っている。彼はすでに部下たちに、私の城を攻撃し、そのことを語る者を一人も生かさないと豪語してい  
る。」

私が話している間にも、酔っぱらいの肉屋は私に対して軍隊を率いて襲撃してくるだろう。

ダルシクールはテーブルに近づき、腰を下ろしてラザロをじっと見つめた。「ここで君は私に重大な貢献をし  
てくれるだろう。何百人もの命 男も女も子供も が君の翼に乗っているんだ、ラザロ。キリスト教徒の飛行  
士として、私は君が神の聖なる御名において、正義と義にかなう奉仕を尽くしてくれることを期待している。」

ラザロは身をよじり、覚悟を決めた。彼はごくりと唾を飲み込み、うなずいた。

ダルシクールは護衛兵たちに言った。「誓いを思い出せ 秘密を守ると。この件については一切口外するな。」  
護衛兵たちはうなずき、ダルシクールはラザルスの方を振り返った。彼はテーブルに身を乗り出し、まるで目に見え  
ない地図をなぞるかのよう指をテーブルの上を滑らせた。「夜になったら、ギルダールの城へ飛んで行  
き、南塔の中央の窓から入ってきてくれ。そこから螺旋階段を上ると上階の廊下に出られる。廊下は城の主人の部  
屋に直結している。左はヒューゴンの部屋、右はエンドラの部屋だ。ヒューゴンの囚人であるエンドラの部屋  
の扉は外から施錠されている。廊下には護衛兵は立ち入り禁止だ。」

ラザロは身を引いて首を振り、大きくため息をついた。

ダルシクールは静かに手を振って言った。「いやいや、心配しないで！よく聞いてください。誰もあなたを見つけ  
られません！ユゴンは内部の警備兵を階段のふもとにしか配置していませんし、彼らは

高い方の窓から侵入することを期待してください。さらに、あなたは険しい崖にまたがる城の裏側から飛び込むので、警備は必要ありません。彼の軍隊は城の正面と側面を警備しており、彼らの目は地上を監視するだけで、空には目を向けません。あなたは誰にも気づかれることなく、また誰にも知られることなく、出入りできます。」ダルシクールはテーブルから身を乗り出し、ラザロに両手を広げて微笑んだ。「ほらね？半晩休まずに飛び続けられる男にとっては、実に簡単な仕事でしょう。主は、ラザロ、あなたの予期せぬ出現によって、私の民を本当に祝福してくださいました。彼らはあなたに永遠に感謝するでしょう。」

「閣下」ラザラスは咳払いをして言った。「私の能力を誤解されているかもしれません。私は半晩は休まずに飛ぶことができますが、飛行中にもう一人運ぶことはできません。それは私の能力を超えています。」

「誰かをどこかへ運ぶことを期待しているわけではない。」ダルシクールは短剣を鞘から抜き、テーブルに突き刺した。「これは重すぎる荷物だろうか？」ラザラスは黒い柄の刃をじっと見つめ、「つまり、エンドラを救ってほしいとは頼んでいないということか？」と尋ねた。

彼が顔を上げると、ダルシクールが首を振りながら言った。「ラザロ、お前が彼女を救うことはできない。全能の神の慈悲だけがそれを成し遂げられるのだ。」彼は身を乗り出し、立ててあるナイフの柄を指で軽く叩いた。「これさえあれば十分だ。羽のように軽く、鷹の目のように鋭い。これを持って行け。」

「閣下、私には必要ありません」とラザロは言い返した。

「いや、力だけに頼ることはできない。ユゴンは大男だ。さあ、お前は力を携えて行くのだ。何も偶然に任せるな。」ダルシクールはラザラスを指さし、ウインクした。

「彼は大柄だが、心配するな。毎晩のように、彼は酔って一人で眠っているだろう。静かな足音で目を覚ますことはない。だから、素早く、そして確実に、彼が息絶えるまで殺せ。短剣は彼のそばに置いておけ。そうすれば、彼の部下たちは、彼が私の刃で殺されたのを発見するだろう。それから、同じ塔の窓から飛び立ち、私のところへ戻ってこい。」

あなたの無事の帰還をお待ちしています。

ラザロは首を振った。「しかし、陛下、私は城の外で陛下の軍隊を見ました。それは壮大でした。」

ヒューゴン卿は、これほどの大軍を城の防衛に配置した場合、どのようにして彼らを打ち負かすことができるでしょうか？

もしかしたら、あなたがそうすれば、血は流されないかもしれない。

ダルシクールは首を横に振った。「城門に集まっていたのは私の軍隊ではなく、手に負えない、歓迎されない暴徒たちだった。その知らせが州中に広まると、彼らはあなたを狙ってやって来たのだ。実のところ、私の忠実な兵士たちはかなり減ってしまい、ほとんどが城内に留まっている。それに、私とは違って、ユゴンはかなりの軍隊を率いている。おそらく、あなたが見た暴徒たちよりも大きいだろう。つまり、彼が攻撃してきた場合、私にはほとんど防御手段がないのだ。」

城の外にある村が最初に陥落するだろう。彼の慣例通り、彼は村を助命するだろう。

命は一つもない。

ラザロはテーブルの上を見回し、選択肢を検討した。「そうすれば、モーセが民を導いたように、村人や兵士を危険から遠ざけることができるでしょう。そして、流血は起こらないでしょう。」

「いや、ラザロ」と彼は口を挟んだ。「私はモーセではない。ここは遠い昔の土地でもない。私は王の家臣であり、ただの領主だ。そしてここは私の土地であり、私の民だ。我々には行くべき場所はない。我々はこの土地で生まれ、この土地を耕し、先祖の影に葬られるだろう。ここが我々の故郷なのだ。もし私が民に、大切なものをすべて捨て、ユゴンが彼らの家を焼き払い、彼の手によって命を落とした父、兄弟、息子たちの墓を汚すことを許せば、彼らは村人も兵士も皆、私に反旗を翻すだろう。そして私は彼らを責めることはできない。」

彼は壁越しにじっと見つめ、他にどんな手段が残されているのかを熟考した。「閣下、もしあなたの民がこれほど少ないのであれば、なぜかつて多数いた時と同じだけの土地を必要とするのですか？もしかしたら、もはや必要のない土地の一部を彼に差し出すことで、彼と和解できるかもしれません。そして、司教を派遣して協定を結び、エンドラを解放させることもできるかもしれません。そして、血を流すことなく」

「ヒューゴンと交渉できる者は誰もいない。彼は私の領地すべてと私の首を欲しがっており、それ以下のものには応じないだろう。彼は理性を失っている。しかも、司教は逃亡し、私に残されたのは翼のある男と短剣だけだ。」

「逃亡？なぜ猊下は逃亡されたのですか？」

ダルシクールは息を呑み、ぶっきらぼうに微笑んだ。彼は目を丸くし、指を組んで、ほとんど不本意そうに説明した。「まあ、私が彼に別の種類の協定を結ぶよう強く求めたからだ。それは一種の非公式な尋問を伴うもので、高まる疑念を鎮め、私の民衆の不安を和らげるのに役立つだろうと考えたからだ。」

ダルシクールは壁際にいる兵士たちを厳しく見つめた。兵士たちは真剣な表情でうなずいた。

ラザロは尋ねた。「異端審問は私のことだったんですよね？閣下と書記官も一緒だったんですよね？」

ダルシクールはうなずいた。「私の民のために、教会の代表者に、あなたが悪魔ではなく、ただの空飛ぶ男であると宣言してもらう必要がありました。」彼は大きく咳払いをした。「城に長期間滞在し、常に身の安全のために警護されていたにもかかわらず、彼は我々の微妙な状況を把握する時間を見つけたのです。これで理由は明らかになったでしょう？」

ラザロは目をそらした。

ダルシクールは続けて言った。「しかし、彼は懸念を抱えたままアヴィニオンへ逃げた。」そして肩をすくめた。「私にはどうすることもできなかった。彼に君を火あぶりにするよう命じさせるわけにはいかなかったのだ。」

ラザロは顔をしかめた。「猯下は私を火あぶりにしようとしたのですか？しかし、猯下は私が空を飛ぶ人間だとお考えになったのです。書記官だけがそうではないとおっしゃいました。」

「構わない。もう彼らは君を悩ませることはない。君は私の保護下にある。そして私の民は今や、ただのキリスト教徒の空飛ぶ男が自分たちの間にいても安心していい。」彼は向きを変えて壁際に立っていた警備兵たちに話しかけ、「これは本当ではないのか？」彼らは声を揃えて答えた。「はい、閣下。」

「それでもあなたは私を悪魔だと決めつけるのですか？」ラザロは彼に尋ねた。

「それは重要だ」と彼は首を素早くひねりながら答えた。「君が無事であることだけが重要だ。」

「閣下、お望みでしたら結構です。私にとって重要なことですから。」

ダルシクールはため息をつき、首を振った。「わかった。正直に言うと、最初は私の兵士の一人があなたの捕獲の知らせを送ってきたとき、私はあなたが ええと、

「もしかしたら、あなたは悪魔だったのかもしれない」彼は肩をすくめた。「彼の記憶では君についての彼の話は、控えめに言っても実に奇抜だった。彼は私に君を集めさせたのだが、君は私の部下の中で最も背の高い者よりも頭一つ分も背が高く、竜のような巨大な翼を持ち、牛さえも丸呑みできるほど大きな牙をむき出しにしていた。だが、それはただの空想に過ぎなかった。君がそこにいた短い期間で、私はそのことを知ったのだ。」彼はラザロに差し出すように手をかざし、くすくす笑った。「君を見てごらん。君は悪魔ではない。いや、どんな悪魔でもない。ただの空飛ぶ男だ。」

ラザロは首を傾げた。「しかし、もしあなたが私を悪魔として集めたのなら、なぜ私を家に招き入れたのですか？」

彼らは互いの目を見つめ合った。

ダルシクールは突然立ち上がり、両手を後ろで組み、床を行ったり来たりしながらラザロに目を向けた。それから彼は突然立ち止まり、踵を返してラザロに完全に向き直り、「そうです。私のような神を畏れる者が、なぜ不浄なものすべてを招き入れるのでしょうか。

「悪魔そのものが、自分の家に？」彼は微笑み、壁に軽く寄りかかりながらラザロを褒め称えた。「君は対話の技術に非常に長けていて、無駄話をする余地はほとんどない。議論と論争においては、君は司教にさえ勝てるようだ。」彼は息を呑み、より真剣な姿勢をとった。「とはいえ、私にとってはそれほど難しい決断ではなかった。謁見を強く求める以外に選択肢はなかったのだから。」

あなたと共に。もしあなたが私の兵士たちが主張したように悪魔であるならば、あなたは私に何らかの契約を持ちかけ、おそらく私には不可能な選択肢を与えてくれるだろうと私は考えました。

ラザロは不安を募らせながら彼に尋ねた。「どのような種類の、ええと、もしよろしければ、どのような契約ですか？」

「確かに、私の民の命を救う協定だろう。もちろん、私自身の命と引き換えに」とダルシクールは認め、ラザルの向かい側の席に戻った。

ラザロは咳払いをして厳かに言った。「もしかしたら悪魔は、あなたの命だけでなく、あなたの魂まで奪ってしまうかもしれませんよ、主よ。」

男はうなずいた。「ああ、ヒューゴンを打ち破り、私の土地と民を彼のような虐殺者から永遠に守ってくれるなら、私の魂を差し出そう。」彼は両手を前に組んだ。

そして彼は嬉しそうに微笑み、「しかし、神の恵みにより、その協定は成立しませんでした。なぜなら、あなたは悪魔ではなく、私の仲間のキリスト教徒をヒューゴンの邪悪な蔓延から救うことができる翼のあるキリスト教徒だからです！」と言い、天井に向かって拳を振り上げ、喜びにあふれて大声で叫びました。「キリストの名において、私の祈りは、悪魔であるヒューゴンから私たちを救い出し、私の善良な民を彼の増大する悪から守ることができる、神の贈り物である空飛ぶ男によって聞き届けられました！本当に、主は驚くべき方法で働かれるのです。」彼は兵士たちの方を向きました。「そうではないか？」

「はい、閣下」と彼らは敬虔に答えた。

ラザルスは顎を食いしばり、一瞬目を閉じ、その瞬間を心の中でじっくりと考えた。「それでも、あなたは私に他人の命を奪えと言うのか。」

ダルシクールは唇をすぼめてうなずいた。「善意と敬虔な意図にもかかわらず

このような事業には、ご不安があるだろうと伺いました。」彼はベストに手を滑り込ませ、ジャラジャラと音を立てる財布を取り出した。「私もまた、あなたに十分な報酬をお約束します。」彼は財布を振った。「ジェノヴァの金貨33枚で、ご不安は解消されるでしょう、そうでしょう？」彼は財布の紐を緩め、重い金貨を二人の間のテーブルにばらまき、こう付け加えた。「ほとんどの人は一生のうちにこれほどの金貨を稼ぐことはありません。しかし、あなたが無事に帰還すれば、これはすべてあなたのものです。私は名誉ある人間であり、私の言葉は真実です。」彼は微笑み、ラザロの方に身を乗り出し、尋ねた。「さて、たった一晩の仕事で一生分の報酬をもらえるとしたら、どう思いますか？」ダルシクールは眉を上げ、ラザロの返事を待った。

ラザラスは、テーブルに突き刺さった短剣と、その長い影に隠れた、かすかに光る金の山を、警戒しながら見つめた。そして首を振り、顔を背けた。「何でもかんでも物々交換できるわけではありません、閣下。」

彼は振り返って、明らかに困惑した様子で両手を上げた。「あなたは自分の魂を差し出す用意があると言いましたが、それはあなたのものではありません。そして今、あなたは私が人の命を奪うべきだと主張しますが、それは私のものではありません。」彼は両手を膝の上に下ろし、ため息をついた。「お許しください、閣下。良識に照らして、あなたの要求に応じることはできません。」

ダルシクールの顔が曇った。彼は顎を引き締め、コインを財布に戻した。ストラップをきつく締め、財布をベストの下に滑り込ませ、テーブルの上で指を組んだ。

そして、ラザロの顔をじっと見つめた。それから、短い沈黙を破って、彼に尋ねた。

「ラザロよ、三人の預言者と蛇の話を知っていますか？」

「私はしていません」とラザルスは認めた。

「では、お話ししましょう」と彼は言い、椅子にゆったりと腰掛けた。彼はラザロの肩越しに、まるで遠くを見つめるかのように覗き込んだ。「事の顛末はこうだ」

「昔々、神の預言者としての才能を授かった三人の兄弟がいました。長男は盲目でしたが、鋭い聴力に恵まれ、どんなに遠くからでもあらゆる悪事を聞き取ることができました。次男は並外れた視力に恵まれ、あらゆる可能性を見抜き、それによって運命の流れを変えることができました。そして末っ子は口数の少ない男でしたが、天使と話すことができるほどの特別な舌の才能に恵まれていました。」

ある朝、二人の兄は盛大なごちそうを用意し、末っ子は彼らとは別々に暮らしていたので、彼らは兄を迎えに行くために出発した。近くの村へ向かう途中、二人が二つの村を結ぶ唯一の踏み固められた道を歩いていると、盲目の兄弟が立ち止まり、警告を発した。「次の丘の上に邪悪な気配が感じられる。待ち伏せしている蛇だ。」

真ん中の兄は道を調べて、「はい、その通りです」と答えた。しかし、森の中に曲がりくねった道が見える。その道は、私たちが安全に兄の村へと導いてくれるだろう。長男は、「私は広い森の道も、まっすぐで狭い道も知りません。もしかしたら、先に進んで蛇が襲ってくる前に退治した方が良くもありません」と不満を漏らした。蛇のことが心配で、「しかし、私は目が見えないので、あなたがたが退治する間、ここで待っています」と付け加えた。蛇を恐れたもう一人は、「神は私たちに鋭い感覚を与えてくださったのだから、わざわざ神の創造物を殺すべきではないのではないかと？それに、あなたは盲目だから、私が蛇を避けようとしている間に、蛇があなたを襲うかもしれない」と答えた。二人は互いに同意し、蛇を完全に避けるべき十分な理由を見出した。そして、村へ向かう途中、森の中へと姿を消した。

その晩、三兄弟は村の小道を下っていった。来るべき宴会の話ですっかり浮かれ、これから起こることを全く知らずに。すると、蛇が飛び出してきて、末っ子のかかとを噛んだ。二人の兄は急いで末っ子を安全な場所に連れて行き、イチジクの木の下で手当をした。その後、それぞれが弟の不幸を互いのせいだと非難し合った。

次男は長男を責めた。「あなたは蛇が道にいることを知っていたのに、私たちが帰る時にその音を聞きつけなかった！そのせいで、弟が襲われたのだ！」

兄は次男を叱責した。「そして、お前は蛇が道中もそうだった、私がこれを頼んだ時にあなたがそれを殺そうとしなかったからあなたのおかげで！今、私たちの愛する兄弟は死に瀕しているのです！」

すると、一番年下の子が異言を叫び、男たちを驚かせて黙らせた。彼は天使が自分に話しかけて、「それは神でした、神は、誰がその道を歩むにふさわしいかを知るために、道に蛇を置いた。そして、神はあなたがたの兄弟たちに祝福を与えたので、悪を知る鋭い感覚を持っていたが、彼らはそのようなものを取り除く緊急性や義務を示さなかった。彼は、今後は蛇がまるで足元に跋扈する竜のように、村人一人ひとりの踵を攻撃し続け、ついには倒されるのだ。」

これを聞いた二人の兄弟は飛び上がり、茂みを叩きながら蛇を追いかけて回し、ついに蛇を殺した。そして証拠として、その死骸をイチジクの木まで運んできたのだが、そこで兄弟の一人が死んでいることに気づいた。

ダルシクールは肘をテーブルにしっかりとつけ、指を組んだまま、ラザロの顔をじっと見つめながら説明した。「三兄弟の場合と同じように、悪を討つ義務を怠ったことが、彼らの兄弟を殺したまさにその悪となったのです。そして、蛇は善人を打ち倒し、奪うためだけに生きています。」

同様に、ヒューゴンも同じことをする。』彼はテーブルを軽く叩いた。「よく聞け、ラザロ。蛇に近づいて殺せるのはお前だけだ。もしお前が拒否するなら、何百人もの善良な男女や子供たちが滅びるだろう。そしてヒューゴンは死ぬまで殺し続けるだろう。神の飛行する人、神の善良な軍隊のしもべとして、お前は自分の

神の民を悪から救うことは、並外れた賜物であり、最大の責務である。私を集めてくれるのか？今日、それはあなた方の神聖な務めなのだ。」

ダルシクールが突然、ラザルスの不安を和らげようと近づいたとき、ラザルスは鼻を鳴らして顔を背けた。「いや、よく聞け、ラザルス。この悪魔ヒューゴンを倒せば、ギルダールの城と領地の私の専属総督に任命し、その地域を統治するための相当な軍隊を与えよう。そうすれば、お前は残りの人生、何一つ不自由なく暮らせるだろう。これらすべてを、お前が短期間で容易に成し遂げられることに対して与えよう。お前が私に仕える限り、私の言葉は我々二人が活着している限り拘束力を持つ。」

「だが、お前は私に殺せと言うのか」ラザロは短剣を見つめたまま口を挟んだ。「もしかしたら、

「別の方法、つまりあなた方二人の間で公正かつ適切な取り決めというのでしょうか？」彼は身を乗り出し、こう主張した。  
「私はこの男の命を奪うことはできません、ダルシクール卿。どうしてもできません。」  
貴族はテーブルに拳を叩きつけた。ナイフは横倒しになった。「神にかけて！」彼は立ち上がった。「キリスト教徒の同胞に対する義務感や慈悲の心は、あなたにはないのか？」

ラザロは謙虚に答えて視線を落とした。「もしよろしければ、主よ。モーセが与えた戒律では、人の命を奪うことは重大な罪です。  
またこうも書かれている。「肉体を殺すことはできても魂を殺せない者を恐れるな。両方を滅ぼす者だけを恐れよ。」 どうして私は同胞への義務や慈悲を示しながら彼を殺すことができるだろうか。  
同じことにおいて？どうして私は神に仕えながら、同じことにおいて神の支配を否定できるだろうか？」

ダルシクールは護衛兵の方を向き、両腕を上げ、そして下ろした。彼は明らかに呆然として彼らを見つめた。「これは一体どういう兆候だ？もしかして呪いに悩まされているのか？」彼はラザルスに手を差し出しながら彼らに不満を漏らした。「彼はまさにここにいる。私の城の中に。彼に対する答えそのものだ。このたった一對の翼で、私の全軍が止められない悪魔ヒューゴンを止めることができるのだ。どうして私は幸運にも空を飛ぶ人間を見つけたのに、彼の信仰の熱意が悪の前では無力だと知ることになったのか？」彼は天井を見上げた。「ああ、神よ、私はこれまで多くの善良な人々を失ってきた！」

「これはヨブの試練と同じようなものでなければならぬのか？」彼は兵士たちに信じられない思いで尋ねた。「これ以上に、民にとって大きな不吉な前兆があるだろうか？」

兵士たちは視線を落とした。  
ダルシクールは両手をテーブルに叩きつけ、ラザルスの方を向いてぶつぶつと文句を言った。「よろしい。お前のせいで、私は多くの有能な兵士、大量の食料と物資、そして貴重な時間を失った。ユゴンの攻撃が差し迫っている今、彼らのうちの一人でも失うわけにはいかなかったのだ！」

ダルシクールは冷静に続けた。「しかし、これらの損失は私自身の決定に起因するので、受け入れる以外に選択肢はありません。結局のところ、私の意志を軽んじてあなたの善意を正当に主張することはできません。しかし、この決定は、何百人ものキリスト教徒、そのほとんどが女性、子供、老人に確実かつ恐ろしい死をもたらすので、間違いなくあなたの責任となります。」それから彼はラザロを非難するように指を振り上げた。「そして、歴史は永遠に、たった一人の利己的な飛行男、ラザロ・ゴグが、その強大な自己正義の剣で彼ら全員を殺したことを記憶するだろう！」彼はテーブルから短剣をつかみ、鞘に収め、軽蔑の眼差しで付け加えた。「これほどの剣、これほどの威力を持つ剣は、何千人も殺すのに振り回す必要すらないのだ！」彼は向きを変え、ドアに向かって突進し、外で「衛兵！」と叫んだ。

突然、ドアが開き、ダルシクール卿と兵士たちが部屋を出て行った。ラザルスは、起こりうる義務とそれに続く期待について考えを巡らせた。

規定されたキリスト教徒の飛行士に同行するかもしれない。

～\*～

城壁の外では、東の空から夜の帳が漂い、衰えゆく太陽はラザロが捕らえられてからまた一つ夜が明けたことを告げる最後の光を投げかけていた。空には、薄明かりの最初の星々が薄い雲と深紅の雲間から輝き始めた。

日没の頃。そして、長い影と静かな窪地の向こう、ダルシクルの城の真西、薄暗い野原と真っ黒な森を抜けてわずか1リーグほどのところに、おそらく3000人ほどの騎兵と歩兵からなる準備万端の軍隊が陣を組んだ。

曲がりくねった峡谷の岩だらけの川床。曲がりくねった列の先頭には、大柄な騎士が鞍に座っていた。兜のバイザーを上げ、拳と前腕の鎧の金具を調整していた。それはボルボネーズのユゴンだった。二人の騎馬騎士が彼に付き添っていた。

ヒューゴンの左手では、騎士が谷の上の曲がり角の方を指さして言った。「閣下、彼が戻って来られます。」

ヒューゴンは、馬を急な土手を下り、谷底に身を落ち着かせて進んでくる斥候に注意を向けた。ヒューゴンが独り言のように呟くと、斥候は駆け出した。「ダルシクルの悪魔はあの少年を殺さなかったのか？」ヒューゴンは二人の騎士の間を細めた目で見た。「これは吉兆か、それとも巧妙に隠された大災いか。」ヒューゴンは急いで近づいてくる斥候を観察し、部下たちに告げた。「彼は何かを身につけている。準備しておけ。」二人の兵士は剣を握りしめ、若者の接近を見守った。斥候は片手に布の束を抱え、それをしっかりと肋骨に押し当てていた。

ヒューゴンの右隣にいた兵士が「もしかしたら負傷しているのかもしれませんがね？」と尋ねた。

ヒューゴンは首を振った。「あの傷にしては姿勢が良すぎる。それに、彼の馬は力強く走っている。」

「策略や悪魔のベールに備えよ。」斥候が進むと、二人の騎士は兜の面頬を下ろし、剣を抜いた。ヒューゴンは微動だにせず座っていた。

斥候は速度を落とし、馬は激しく息を切らしていた。

ヒューゴンは遅れたことを指摘した。「この城はイングランド王国にはないんだよ、坊や。」

「恐れ入ります、殿下」と息切れした斥候は言った。「召使いは高齢で到着が遅れました。城から森の端までは彼にとって長い道のりだったのです。」

「では、それを言ってみる。召使いは何と言う？」

斥候は馬をヒューゴンに近づけ、馬の上で身を乗り出し、息を整えてささやいた。「閣下、占星術師の予言は本当です。確かに、ダルシクル卿は翼のある悪魔を捕らえました。彼はそれを厳重な警備の下、下層階の牢獄の一つで、高貴な客人として迎え入れています。また、司教は

聖座の権威によって正式な布告を発し、キリスト教徒の空飛ぶ男だと主張したが、司教はその後姿を消した。召使いも約束し、

「もしあなたが城を早めに攻撃すれば、ダルシクール卿の防衛態勢は整っていないだろう。」少年はうなずいた。「おっしゃる通りだと思います、閣下。城が嚴重に警備されている様子は見ませんでした。それに、農民たちは村に留まっていて、何の心配もしていないようです。」

そして、森の境界線沿いにもその向こう側にも、巡回している姿は見かけなかった。森の中に野ウサギが一匹いただけだった。

ヒューゴンは斥候の手にある包みを指さして頷いた。「それで、私のためにウサギを捕まえてくれたのか？」

「いえ、閣下」斥候はそう言って、ヒューゴンに包みを手渡した。「私は何の苦勞もなくここまで来ました。これは召使いからの贈り物です。閣下のご進軍を歓迎する召使いからの感謝と忠誠の証です。閣下と他の方々のために十分な量を入れており、閣下と部下の方々のために宴会を用意していると言っていました。」

ヒューゴンは包みを手に取って重さを量り、布を広げると、何層にも重なった薄切りの豚肉が現れた。彼は肉の匂いを嗅ぎ、うなずいてから斥候に尋ねた。「素晴らしい食べ物だ。」

戦いの前に、どう思いますか？

「ああ、閣下。素晴らしい料理だったと伺っております」と若者は微笑みながら答えた。「しかも、敵の厨房で調理されたものなのか。」彼はヒューゴンの二人の騎士に、共に笑う様子がないかと目を向けたが、そこには険しい視線しか見当たらなかった。彼らは剣を鞘に収めた。

ヒューゴンは少年に答えた。「その通りだ。敵からもらった食料だ。」彼は布を折りたたみ直し、包みを少年に投げ返した。「さあ、思う存分食べなさい。」

少年はごくりと唾を飲み込んだ。「殿下？」

「あなたはここに誰よりもこの善良な僕をよくご存知でしょう。彼と会い、話をし、そして彼の目をまっすぐに見つめたのですから。彼が誠実な人物だとは思いませんでしたか？」

「ええ、でも彼は、その贈り物は特にあなたのために用意されたもので、私は道中肉を一切食べないと言っていました。」

「しかし、あなたはまだ道を外れていません。なぜなら、あなたは今、私と一緒にここにいるからです。そして彼は、他の人には十分なものがあると仰いましたよね？」

「はい、閣下。」

「では、戦いの前に肉と満腹の腹を用意しよう。食べろ！」

ヒューゴンの右隣にいた騎士は不満を漏らした。「閣下、彼はまだ少年です。閣下の命令にはすべて従ってきました。」

ヒューゴンの左にいる兵士がもう一人の兵士に反論した。「もし彼が閣下の命令にすべて従っていたなら、今頃は肉を噛んでいるはずだ、そうだろう？」

「確かに」とヒューゴンは同意した。「さあ、肉を召し上げ、坊主！腹いっぱい食べなさい。」

右隣の騎士は目を丸くして背を向け、左隣の騎士は斥候に向かって笑い、唇を鳴らした。若者は布を開け、むさぼり食った。

提供。

ヒューゴンは振り返り、沈む夕日の最後の輝きに目を留めた。「キリスト聖下と、私の良き占星術師、そして彼の月見盤のおかげで、運命は我々と共にあります。」彼は騎士たちの方を振り返った。「そして、ダルシクールの領地が我が旗の下に統合された時、両地域は一つの偉大な州となり、国王陛下のフランス防衛において、神の意志に忠実で揺るぎない力として仕えることになるだろう。」ユゴンは愛馬を夕日の方へ向け、軍隊を視察し、騎士たちに命令を下した。彼の右側に。「弾薬運搬車が迅速に前進できるよう、確実に固定しておいてほしい。ダルシクールの弓兵が城壁の上に到着する前に、攻城用荷車の列を配置しておくように。同時に、破城槌も所定の位置に設置しておけ。」そして彼は左にいる騎士に命じた。「お前は部下に村を掃討させ、農民たちを城へと追い立て、ダルシクールの弓兵の射程圏内に留め置くのだ。その間に、精鋭部隊の一部は城門の破城を援護せよ。さあ、進軍を命じるべく、全軍にその旨を伝えよ。」

ヒューゴンの二人の隊長が彼の傍から逃げ去った後、彼は馬の向きを変え、口いっぱい肉を頬張っている斥候を観察した。彼は指を鳴らし、手を振って、若者は彼の指示に従い、布を畳み直し、包みを渡した。ヒューゴンは包みを鞍のサッチェルにしまい込み、兵士を下がらせた。「隊列に加われ、坊主。」

斥候は手綱を引き、馬に鞭を入れて走り出した。

今や一人きりとなったヒューゴンは、背後に大軍を従えながら、暗い東の空を見上げ、独り言のように呟いた。「悪行には代償が伴うものだ、ダルシクール。お前の傍らに悪魔がいても、私はお前の首を刎ねる。神がお前の魂を刎ねるように。」彼は馬の脇に身を乗り出し、鼻をきれいに吹き、鞍に腰を下ろした。こうして、根が張り巡らされた乾いた川床の壁の間で、ヒューゴン卿の軍勢は進軍の準備を整えていた。獣たちは鼻を鳴らし、兵士たちは号令を叫び、鎧と武器の絶え間ない響き渡る音に、夕暮れの虫たちの甲高い鳴き声が絶え間なく加わっていた。

～\*～

まるで蜘蛛が夕暮れの獲物の上に糸を紡ぐように、時は死にゆく空を暗闇の繭へと巻き込み、そして変容した天空を、また新たな夜明けの輝きへと解き放った。赤い太陽が昇ると、長く残る影はすべて消え、ダルシクール城のまばらに守られた城壁の鋭角が和らいだ。そして城の内部では

粗末な扉の向こうに閉ざされた石造りの要塞の中で、ラザロは重要な客人であり、同時に厳重に監視された囚人として留まっていた。

エルジョは、死んだネズミを思い出した部屋の隅まで歩いて行った。しゃがみ込み、指で敷石をなぞり、匂いを嗅いだ。かすかに埃とワインの痕跡しか感じられなかった。困惑して立ち上がり、部屋の他の隅々まで探した。もしかしたら、どこか別の場所で死骸を見かけたのかもしれないと思ったからだ。しかし、そこも同じように空っぽだった。彼は顎を突き出し、奇妙な記憶について考え込んだ。死んだネズミという概念自体は、彼にとって大した問題ではなかった。ラザルスを本当に悩ませていたのは、初めて、記憶の中の現実認識が真実と矛盾していることに気づいたことだった。修道院の地下墓地で過ごした日々の中で、彼は常に物事をありのままに認識し、感じ取っていた。もし彼が音を聞けば、その音は現実のものであり、明確な発生源があった。彼が視界の隅で動きを捉えたとき、そこには確かに光と影の変化があり、それが動きのイメージを作り出した。彼が善や悪の存在を感じたとき、その感覚を正当化する近くの記事やその後の啓示が必ずあった。そして、彼の記憶はこれまで一度も彼を裏切ったことがなく、あらゆる言葉や図を記憶する彼の能力によって大胆に裏付けられていたので、

あらゆる書物、写字室全体から

彼は大きくため息をつき、テーブルに向かって大股で歩き、死んだネズミの謎を振り払い、髪を後ろに撫でつけた。

彼は粗末なドアの方に耳を澄ませ、外から聞こえてくる新しい音に気づいた。やがて、音がドアの金属製の留め金が外れる音が聞こえ、続いて同じ洗濯女が入ってきた。彼女の腕には黒い布がかけられていた。

ラザロは微笑んだが、彼女は同じように歓迎の表情を返さなかった。代わりに、彼女は布を広げ、彼のために特別に仕立てられた黒いシャツを差し出した。「何の役に立つかはともかく、こちらの方があなたにはよく似合うでしょう。」彼女は彼をじっと見つめ、こう付け加えた。「

「白いシャツがワインの染みで台無しになっちゃったわ。」彼女は前に出て、シャツを空中に放り投げ、彼のために開いた。「さあ、行きましょうか？」

「ああ、そうだ」とラザロは言い返し、彼女がシャツを着せてくれると、シャツに背中を押し付けた。そして、「もう一枚のシャツも洗ってみようかな。ワインで汚れた服はたくさん洗ったことがあるから」と提案した。

「それで、そのローブは何色だったの？」と彼女は得意げに尋ねた。

「茶色系の色合いが多かったですね。ほとんどがそうでした。」

「その通りです。それらは白くありませんでした。白は容赦のない色です。これからは首からつま先まで黒を着なさい。そうすれば、ワインや悪徳、不器用さ、その他あなたを汚す墮落の汚れに悩まされることはもうありません。」彼女はシャツを彼の翼にぴったりと着せ、彼をくるりと回し、彼のブラウスのボタンを留めることに忙しくした。彼女はそれ以上のやり取りはせず、自分の手を見つめていた。ラザロは彼女の唇を何度も見つめた。

年齢を重ねて指の器用さが衰えると、人はつい新しいボタンを押すたびに指をすぼめてしまうものだ。

沈んだ表情のラザロは目をそらした。「私の愚かさをお許してください。シャツを汚すつもりはなかったのです。」

「ああ、染みじゃないのよ」と彼女は慌てて言った。「何でもないわ。」

「では、何があなたを悩ませているのですか？」

「何も心配いりません。それに、私のような年老いて愚かな未亡人のことなど気にかけなくていいんです。さあ、腕を貸してください。」

ラザロは腕を伸ばし、彼女が彼の袖口をまっすぐに直した。彼は尋ねた。「もしよろしければ教えてください。私はどのようにあなたを裏切ったのでしょうか？償うことはできますか？」

女性は嘲るように笑い、目をくるりと回すと、彼のもう片方の袖口を直ただけだった。

ラザロは彼女の手にとっと手を重ね、彼女の指を静止させた。

視線が絡み合い、ラザラスは彼女の目に宿る苦痛を感じ取った。彼女は突然、彼から手を離し、一步後ろに下がり、腕を組んだ。「あなたにはそんな権利はありません、ラザラス様。」

ラザロは言った。「私には理解できません。もしシャツのせいではないとしたら、私は一体何をしたというのですか？」

彼女は首を横に振り、彼を睨みつけた。「あなたは何も悪いことをしていません。そして、あなたにとってすべては当然のことです。あなたのために私が口出しするのは筋違いです。」彼女は軽く手を差し伸べ、こう続けた。「あなたは貴族の沐浴をし、王の宴に招かれ、今、最高の服を身にまとっています。さらに、あなたはあらゆる点で礼儀正しく、何が正しく何が間違っているのかを深く確信しています。それは間違いなくあなたにとって大きな助けとなるでしょう。それだけでなく、あなたは健康に恵まれ、自分自身と神以外には何にも縛られることなく、長く充実した人生を送るでしょう。そして、あなたのあらゆる美德と祝福のおかげで、あなたは今、我が主があなたを解放し、ここから遠く離れてこの苦難の場所を忘れさせようとしていることを知るといふ幸運に恵まれているのです。」

ラザロはたちまち喜びで顔を輝かせた。「彼は私を解放してくれることに同意したのか？」

彼女はうなずき、厳粛な面持ちで言った。「確かに、彼はそういう方です。旦那様は、たとえ同じような美德に欠ける人に対しても、優しく思いやりのある心の持ち主です。」

ラザロは笑顔を消した。「私が望むのはただ…彼が私に頼んだことは…おそらくあなたは知らないでしょう…」

「ラザラス様、私はすべてを知っています。あなたが想像する以上に。」

"おお?"

彼女はため息をつき、両手を腰に当て、頭を大きく振りながら話した。

「ええ、そうです。私はダルシクール様の専属メイドとして仕えており、

私の人生の大半は子供たちと過ごしています。私は、起こる出来事すべてを、それが展開していく瞬間から把握しています。ですから、私は彼があなたに、これまで自宅に迎えたどの著名な客人にも示さなかったほどの礼儀を示したことを知っています。ブーツでさえもあなたの足元にある服は彼の父のものでした。そして今あなたが着ているブラウスも彼のものです。そして私は知っています、たとえ食料が不足していたとしても、彼は一度も自分自身のために催したことのない宴をあなたに楽しませようとしてきました。それはまさにフランス国王陛下にふさわしい宴でした。そして今日、私は彼に謁見を懇願し、部屋の扉を開けるよう強く求めた時、あなたが私たちをユゴンから救うことはできないと悟りました。あなた自身の信念。」

彼が口を開こうとしたが、彼女は彼の言葉を遮った。「ラザルス様、今日、私は長年の人生で一度しか見たことのない光景を目にしました。それは、殿下が愛するダルシクール夫人とその兄弟たちがギルダール城でヒューゴンの手によって惨殺されたことを知った日の、あの忘れがたい苦痛の表情です。ラザルス様、私が目にしたその光景を、お知りになりたいですか？」

ラザロは話し始めた。「あなたは何をしたのですか」

「彼が泣いている間、私は彼を抱きしめていたのよ。まるで小さな男の子みたいに泣いていたわ！」彼女はそう言い放った。彼女の目は涙でいっぱいになったが、なんとかこらえて続けた。「でもね、彼は自分のために泣いたんじゃないの。いいえ、違うわ。彼の心を知っているから。彼は私たちのために泣いたの。彼が守ることのできない私たちみんなのために。彼はヒューゴンが私たちに何をするかを知っていて、それを防ぐことができない無力感を感じているのよ。」

それから彼女はよろめきながらテーブルまで行き、ベンチに倒れ込み、両手で顔を覆った。彼女は涙を流し、すすり泣きながら泣き崩れた。

ラザロは今、彼女のそばに立ち、全く無力感に苛まれていた。彼は振り返ってドアの方を見た。彼女の泣き声が誰かに届き、慰めてくれることを願ったのかもしれない。しかし、女の泣き声にドアが開くことは決してなかった。彼は顎を食いしばり、壁をじっと見つめた。まるで壁に書かれた場所、彼女を慰める適切な言葉、彼女の痛みを和らげ、自分の高鳴る心臓を落ち着かせる言葉を探しているかのようだった。彼女の泣き声は、まるで彼自身の抑え込んだ痛みから発せられているかのようだった。まるで彼女は、彼自身を含めた皆のために泣いているかのようだった。そして、彼女が新たな悲しみを爆発させるたびに、彼はナイフが胸に深く突き刺さり、彼の心の奥底を削り取っていくような気がした。彼の心の中では感情が渦巻き、痛み、怒り、悲しみが、どこか深く破れた器から沸き上がってくるようだった。ラザロは、両手で顔を覆った悲嘆に暮れる女を見た。そして、彼が探し求めていた次の涙は、彼女の腕を伝うのではなく、彼自身の頬を伝った。あと2人

最初の涙が流れ落ちた。そして、まるで至る所で雨が降り始めたかのようだった エデンの園でさえも。

ラザロは唇を噛み締め、女性の亡くなった家族のために泣いた。

彼は自分自身のために涙を流した。ダルシクールとその民衆には、ユゴンからの救済の望みがほとんどなかったからだ。そして、父以上の存在になり、何百人もの人々を悪から救う準備ができていない自分自身のために涙を流した。

彼の心の中では、信念が苦悩と怒りへと変わっていった

彼はテーブルの上に両手を叩きつけ、女性は恐怖で黙り込んだ。

「ラザロ様、どうかお許しください」と、女性は気を取り直して懇願した。

ラザロは急いで顔を拭き、息を吸い込んだ。「彼の命令に従います。もしあなたが望むなら、私はダルシクール卿との二度目の謁見。

「ああ、神様、どうか私たちをお救いください！」女は突然立ち上がり、ラザロに飛びついた。あまりの喜びに、ラザロはよろめきそうになった。

それから彼女は彼を解放し、彼の頬を拭いた。満面の笑みを浮かべて彼女は彼に告げた。「今すぐ旦那様をお呼びします！きっと大喜びされるでしょう！」彼女は背を向けようとしたが、彼の腕をつかんだ。「あら！他に何かご用でしょうか、ラザロ様？」

しかしラザロは返事をせず、彼女の存在すら認めようとしなかった。彼は粗末な扉をじっと見つめ、沈黙の中に沈み込んでいた。

女性は彼の視線を追ってドアの方を見た。「ラザロ様？」彼女は彼の方を振り返った。

「何が？」

ラザロは入り口から目を離し、「あの二本の角は何を意味するのですか？」と尋ねた。

彼女はドアの方を振り返り、角のようなものが取り付けられていないか探した。「そこには角はありません、ご主人様」

遠くからトランペットの音が城の下層階の廊下に響き渡り、ラザルスは扉の方を指さして、「今度は3度目だ、男たちが叫んでいる」と付け加えた。

彼女は口を覆った。女はただラザロを見つめ、その瞳を通して魂のすべてを吐露した。そしてラザロは、彼女の恐怖を差し迫った破滅の恐怖として捉えた。彼は彼女を見つめていた。

彼女の顔色は、以前着ていたシャツの色よりも青白く、まるで幽霊のように形のない姿だった。彼女は彼の前に立ち、まるで内面で死にゆくかのようなようだった。

彼女の瞳の色だけは変わらず、白目は深紅に染まり、涙が溢れ出した。

「何が起こるんだ？」と彼は尋ねた。

彼が彼女を止めようとする前に、彼女はドアに向かって駆け寄り、ドアを叩いた。「開けて！ドアを開けて！」

ラザロは女性に近づくと、警備兵たちが足を引きずる音を聞いた。「どうしたんだ？」

「ヒューゴンだわ！」彼女はドアを蹴りながら叫んだ。「衛兵たち、すぐにこのドアの門を外せ！」

ラザロは彼女のそばに寄り添い、拳でドアを叩きつけると、ドアは枠にぶつかりながら震えた。

扉が開くと、戦闘準備を整えた兵士たちが大勢現れた。ラザロは彼らの顔に見覚えがあった。

先頭に立っていたのは、全身が赤い髪で覆われた巨漢の兵士だった。

「神に感謝！」と女は大きくため息をついた。彼女はラザロをつかみ、「さあ、急いで！」と言った。彼女は彼の耳元に顔を近づけ、激しくささやいた。「あなたの翼があれば、城の最上階の窓から脱出する方法が見つかるかもしれないわ。私がそこへ連れて行ってあげる。」赤毛の兵士が前に進み出て、二人の間に割って入った。彼はラザロから女の手を無理やり引き剥がし、「空飛ぶ男はここに残る。お前は行け」と告げた。そして二人の衛兵を呼び、「女を奥の砦へ連れて行け。負傷者の手当てをさせるのだ」と命じた。

「待って！だめよ！」彼女は抗議し、二人の衛兵の拘束から逃れようともがいた。「彼はここにいてはいけないわ。手を離して！彼女が抵抗し叫ぶ中、衛兵たちは彼女をドアの方へ引きずり込んだ。「彼はヒューゴンを殺すことに同意したのよ！彼を解放して。私を放っておいて！」

赤い巨人はラザロを寄せ付けず、胸にしっかりと手を当てながら女の叫び声に負けないように大声で叫んだ。「彼を無防備にしておくわけにはいかない！」そして護衛たちに「立ち去れ！」と怒鳴った。「彼女と一緒に！」彼はラザロに短剣を突きつけ、「お前も一緒に行け」とぶつぶつ言った。大男が入口の方へ後ずさりしながら肩越しに叫ぶと、ラザロは部屋の奥へと退いた。「空飛ぶ男を中に封じ込め、この扉を守り抜くのだ。」女性の叫び声が遠くから聞こえてくる重なり合う悲鳴にかき消される中、ラザロはテーブルに寄りかかり、赤毛の男が兵士たちを部屋から連れ出すのを見ていた。そして男がドアを完全に閉める前に、狭い隙間から覗き込んだ。

ラザルスに「あなたはヒューゴンを殺すことに同意したのですか？」と尋ねるために切り出した。

ラザロは顎を食いしばり、うなずいた。

男はラザロのブーツに目を落とし、「ヒューゴンは敬虔な男だと自称しているが、我々は彼の残虐行為を目撃している。そしてお前は悪魔のように見えるが、我々のためにその残虐者を殺そうとしている」と告白した。彼は首を横に振った。「もし今日、神の天使たちが我々と共にいるのなら、誰を助けるべきかを誰よりもよく知っていることを祈る」彼は大きくため息をつき、うなずいた。「もし私が決めることなら、お前に私の剣を渡して、お前を行かせるだろう」それから彼は肩をすくめて言った。「だが、私の意志であなたを捕らえたり、解放したりできるとでもいうのか？私の手は縛られている。私はただ剣の背後にいる男に過ぎない。」兵士は自ら退散し、粗末な扉の向こうにラザルスを閉じ込めた。エルジヨはナラムシンの恐ろしい運命 生き埋めにされ、その存在ゆえに確実に滅びる運命にあったことを思い起こした。ラザロはテーブルの上で腕を組み、自らの過酷な試練を思い巡らしながら、同時に、自分の復活の真の原因と手段は何だったのかを考えていた。「おそらく」と彼は思った。「キリストにある貧しい人も、人生の最期の数日間、この世における自分の立場について思いを巡らせていたのだろう。」

彼は自分の姿を映し出す鏡のように、磨き上げられた真鍮製の燭台の台座をじっと見つめていた。

彼は振り返った。歪んだ自分の姿に近づき、そのグロテスクな特徴を調べた。まるで伝説の嘘つき鏡のように、光沢のある表面には、驚くほどハンサムな男のあらゆる面を備えた、新たな彼の姿が映し出されていた。大きな耳や犬のような歯、そして彼が本来持っているエルジョ族の特徴は、どこにも見当たらなかった。

「父よ、今の私を見てください」とラザロは弱々しい笑みを浮かべながら言った。「私はあなたの姿に似せて、新しく生まれ変わりました。」

彼は乾いた笑いを漏らし、テーブルを叩き、ドアとその警備兵に向かって叫んだ。「もう大丈夫だ！」と。「ほら見てごらん」と、彼は燭台を指さしながら皮肉っぽく叫んだ。「私は君たちと同じだ。だから私を解放していい。もう空を飛ぶ人間じゃないんだ！」

彼は作り笑いを浮かべ、反応を待った。額から汗が流れ落ちた。しかし、聞こえてくるのは、防御態勢を整える兵士たちの声と物音だけだった。ラザルスの作り笑いは消えた。

外から兵士が「我々は命をかけてこの扉を守っている」と叫んだ。

ラザロは兵士の命令に反論し、「ならばそれを保持せよ だが、公然と保持せよ」と叫んだ。

そうすれば私は自由になれる！

兵士は彼を無視しているようで、おそらく戦闘準備を続けていたのだろう。

ラザロは嘘つきの鏡に向かって、「彼らは私を救う手段を奪うことで私を守ろうとしているのか？」と不満を漏らした。彼は歪んだ自分の姿から身を引いてため息をつき、彼の額には汗の筋が流れていた。

「ドンドン、ドンドン、ドンドン」ゆっくりと一定のリズムで叩く音が遠くから響いてきた。

それは深く響き渡る音だった。まるで全世界の巨大で容赦ない鼓動のようで、その絶え間ない反響が部屋のあらゆる石の表面を轟かせていた。ラザロは彫像のように座り、燭台の渦巻く炎を見つめていた。耳をそばだて、遠くからだが次第に大きくなる殺戮と混乱の叫び声に耳を傾けると、城の内部で戦いが繰り広げられているようだった。死の音がますます彼に近づき、かつては聞き取れなかった男たちの叫び声ははっきりとした言葉になり、決死の戦士たちの決闘の呼び声や名前がはっきりと聞こえるようになると、ラザロはただ座って、耳を傾け、推測し、ヒューゴンの手の下での自分の運命を思い悩むことしかできなかった。「父上」と彼は声に出して呟いた。「あなたの死の日以来 すべての

古文書や写本、あるいは擦り切れて破れた世界地図を除けば、おそらく私はこんな短い時間で、どんな修道院でも明らかにできないほど、この邪悪な場所について多くのことを集めたのだろう。」彼は炎の中に消えていった。一筋の涙が彼の頬を伝った。

～\*～

必ずヒューゴンの部下たちはダルシクルの門番を圧倒し、新しい兵士たちと入れ替えた。ラザロはそれをすべて聞いていた。心からの最後の言葉さえも。

祈りを捧げていたが、ヒューゴンの弓兵たちはその場に陣形を崩した。負傷した兵士たちがヒューゴンの兵士たちに懇願する声が聞こえたが、言葉は途切れ、叫び声やうめき声が聞こえた。死体を運び出し、扉の警備を引き継ぐよう指示する声が聞こえた。新しく交代した警備兵たちが、空飛ぶ悪魔、恐ろしい怪物、大疫病、不吉な前兆、悪の啓示、その他伝聞の予言についてささやき合う会話の中に、不安が滲み出ているのが聞こえた。実際、ラザロはそれらすべてを聞いていた。そして、もう十分だった。

彼は燭台を睨みつけた。ろうそくは一本ずつ、弱々しく消えていった。そして最後に残ったろうそくの光の下で、彼は自分の姿が全く異様な、グロテスクな形で映っているのを見つけた。燭台の真鍮製の台座の新たなねじれや角度、そしてこれまでとは違う角度から、彼は獣のような男の姿を見つけた。耳は高く、顔は細長く、まるで突き出た犬の鼻面のようなようだった。彼は顎を食いしばり、新たに歪んだ自分の姿を振り払い、ドアの方へ注意を向けた。そこからは、まだ警備兵たちが彼のことを囁き、声に出して不思議そうに話しているのが聞こえた。

彼はテーブルから立ち上がり、燭台をつかんで粗末なドアに投げつけた。壊れた破片が床に飛び散った。「俺は空飛ぶ悪魔なんかじゃない！怪物なんかじゃない！俺は」

彼は息を切らし、飛び出してきて、拳でドアを叩きつけながら叫んだ。「本当の怪物とは、兄弟を殺す男以外に誰だ？一体何のために？兄がかつてそうしていたように、同じドアを守るためか？そして、一度も人を殺したことのない私をここに閉じ込めるためか？違う、お前たちこそ怪物だ！お前たちは悪魔だ！お前たちはあらゆるものの疫病だ！」

正論だ！お前こそ疫病だ！

彼と警備兵の間にはほんの数インチの木片しかなかった。しかし、返事は聞こえなかった。足音や呼吸音さえも聞こえなかった。彼は背を向け、大きなため息。

圧倒的な安堵感がラザロを謙虚にさせた。彼は静かにテーブルの周りを回り、干し草のベッドに向かいながら、「もしかしたら、私は彼らが言う通りなのかもしれない」とつぶやいた。彼は藁のマットレスの上にひざまずき、ナラムシンの運命について思いを巡らせた。「世界は彼らのものだ。空を飛ぶ者の居場所はない」

ラザロはうつ伏せになり、夢の世界だけを求めた。二度と目覚めず、人間界という悪夢に二度と直面しないことを願って。彼は本当に、昼間でさえ夜のような暗闇と深い影の場所を切望していた。彼は何も望まなかったが、おそらく、

虚無の王国、そこはすべてが無である場所。創造の雑然とした屋根裏部屋、そこには不幸な生き物や捨てられた生き物が集まっていた。叩かれたハエ、網にかかった魚、屠られた子羊、そしてもしかしたら空飛ぶ怪物さえも。

【第15章終了】



この文学作品は、

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~